

オスカー・ワイルドの『人間の魂』における 自己発展と共同善

——個人主義、イギリス観念論、倫理的社会主義

町本 亮大

Oscar Wilde の社会主義は奇妙なものであるといわれる¹。それは「個人主義」の実現に貢献する限りにおいて有意味に要請されうる政治イデオロギーであると考えられているし、同時代のフェビアン主義のそれがそうであったような、国家の介入すべき領域の拡大を志向する社会主義とは反対に、国家そのものの消滅、あるいはその任意団体 (voluntary association) の一つへの「格下げ」を主張するものであった (Wilde 246)。1873 年以後の不況、84-85 年の選挙法改正 (これにより全有権者の過半数を労働者階級が占めるようになった)、89 年代以降に順次公刊される East End と York をそれぞれ舞台とした Charles Booth、Seebohm Rowntree による社会調査等を背景として、古典的自由主義と自由放任型経済、それらの理論的支柱としての原子論的個人主義が広く批判にさらされるようになり、構造的に生み出される貧困²の解決に向けた国家の積極的介入を初め、国家が担い手となる社会改革を要請する「新自由主義」(New Liberalism) の潮流が次第に形成されていく時代の趨勢に照らし合わせれば、「共同体」よりも「個人」を重視し、国家介入の領域の拡大でなく統治そのものの消滅を主張する Wilde の *The Soul of Man* (1895; 初出時 “The Soul of Man under Socialism,” 1891) が読者に奇異なアナクロニズムの印象をもたらしたとしても不思議ではない³。Wilde にとって、社会主義は個人主義に従属せねばならないものであった——“Socialism itself will be of value simply because it will lead to Individualism” (233)。

しかし、世紀末のイギリスにおける社会主義は単一の潮流に還元することができないものではない。社会制度の合理的変革を志向するフェビアン流の設計主義的社会主義もあれば、精神的変革に重点を置き、個人の潜在的資質の実現と社会的善の究極的調和のヴィジョンを説く倫理的社會主義もあった。本稿は、マルクス主義やフェビアン主義と区別することのできる社会主義の一潮流としての「倫理

的社会主义」(ethical socialism)の特異性を思想史的に整理し、Wildeの社会主义論をこの潮流との関連において解釈することを試みる。以下すぐに見るように、そうすることで、Wildeのいう「個人主義」が、同時代に存在したりバタリアンの無政府主義を標榜する同名の政治運動よりも、個人の人格の陶冶を問題にする卓越主義をその核とする倫理的社会主义と多くを共有する概念であることを明らかにしたい。また倫理的社会主义とWildeの親近性を問題にすることは、同時に、前者に靈感を与えたT. H. Greenに代表されるイギリス観念論／理想主義(British Idealism)とWildeの関係へと目を向けることでもある⁴。そうすることでわれわれは、イギリスにおける観念論哲学の牙城であったオクスフォードにおいて学んだWildeが、その学生時代にBenjamin JowettやWilliam Wallaceらのヘーゲル主義者から被った影響を跡付けるSmithとHelfandの研究を発展的に継承する——たとえばWildeの著作を、個別の影響関係に限定されない形で、イギリス観念論という思想史的文脈の内に位置づける——契機を得ることができるともかもしれないし、より大局的な視野に立つならば、イギリス思想・哲学研究においてさえもしばしばマイナーな領野としての扱いに甘んじるイギリス観念論という思潮を、一つの思想史的な文脈として、世紀転換期のイギリス文学研究に導入する端緒とすることも可能であるかもしれない。

*The Soul of Man*を倫理的社会主义との関連から検討することに先んじて、同時代の政治運動としての「個人主義」に言及することから始めよう。Wildeのエッセイを世紀末の「個人主義」の文脈において論じる必要を指摘したのはJosephine M. Guyであった。Guyによって言及されている「個人主義」(Individualism、多くの場合において冒頭が大文字で綴られた)⁵とは、Herbert Spencerの圧倒的な影響下に著述活動を展開したAuberon Herbert、Wordsworth Donisthorpe、Arthur Bruce Smithらを代表的な論客として挙げることのできる世紀末の短命な政治運動であり、その思想の核心を形成するのはSpencerの「平等の自由の法」(“the Law of Equal Freedom”)であった。彼の言葉を引けば、それは“every man may claim the fullest liberty to exercise his faculties compatible with the possession of like liberty by every other man” (94)という原理であり、その自由概念の理解はJ. S. Millの危害原理、Isaiah Berlinの消極的自由と親和性が高いものであると考えることができる。すなわちここでは共同体の他の成員の自由(各人同等の自由 = equal freedom)を侵害しない限りは、いかなる行為をも成す自由が個人に存すると考えられ、当の行為の内実に関する価値判断は問題にならない。

個人主義者たちは、「平等の自由」の原理の信奉に付随して、自由放任経済を

支持し、国家干渉は完全に廃することができないにせよこれを必要悪とみなさねばならず、個人の権利とりわけ所有権を制限するいかなる立法も不正であると考えた。彼らにとり、競争は人間社会の進歩の原動力であり、社会生活に統制と秩序をもたらす原理であった (Taylor, *Men* 4)。

個人主義者は、自らを自由主義の正統的継承者であると主張した。20世紀半ばより振り返れば自由主義の意味をめぐる闘争に勝利したとみなすことのできる新自由主義 (New Liberalism) は、先にも言及したように古典的自由主義の支持するレッセ・フェールの不備を指摘し、国家干渉の領域の拡大を志向した。ベンサム主義のうちには、自由市場の擁護と同時に、最大多数の最大幸福を実現するための立法を通じた合理的制度設計への意志が存在していたのであり、個人主義者は前者を、新自由主義者は後者を継承することによって、双方ともベンサム主義、古典的自由主義の正嫡を自認することが可能だった (Taylor, *Men* 5)。

こうして個人主義者は急進主義の遺産を保守主義の信条へと転換した。時代の趨勢は大きな政府に向かっており、国家干渉の領域の拡大は新たに選挙権を付与された労働者階級の利害に合致しているように感じられたのだから、個人主義者は世紀末において、民主的改革に敵対し、地主階級の利害を擁護する保守勢力としての様相を呈するようになったのである (Taylor, *Men* 34)。しかし第三次選挙法改正以後のおよそ二十年に及ぶ「保守党支配の時代」は、労働者階級の保守主義への組織、動員の成功により実現されたのであり⁶、世紀転換期の保守党が社会改良に取り組むことの重要性を認識するようになっていた状況下で、個人主義は保守主義の重要な一潮流として自らを確立することができず、1880年代から1910年代までの間に限定された短命の政治運動として歴史の舞台を後にした (262-74)。

Wildeのエッセイと個人主義者の著述が明確に共有する論点は、国家による統治は最小であることが望ましいとする観点である。双方において、個人の自由と国家の権力は相対立するものであり、「個人主義」のためには国家による統治、その権威が削減されなければならないと考えられている。

しかし、大きく二つの点で個人主義者と Wilde の主張は異なることに注意しなくてはならない。第一に、個人主義者の最重要目標は私有財産の保護であるが、Wilde はこのエッセイにおいて私有財産制の廃止という正反対の主張をしている。言い換えれば、Wilde は社会主義の必要性を訴えているのであるが、個人主義者は当の社会主義を反動的思想とみなし、社会主義とは歴史における退歩であると考えた⁷。個人主義者は“Liberty and Property Defence League”⁸の周辺に集まった

理論家たちであったが、少なくとも一方の「所有」に関して、彼らと Wilde は正反対を向いている。

それでは他方の「自由」に関してはどうか。一見したところでは、無政府主義的な自由観、すなわち個人の自由に至上の価値を置き、国家権力の強大化や世論の専制といった、あらゆる外的権威の存在を否定しようとするところで両者の関心は一致しているように思える。個人の外部に存する権威を排して個人の内的自由の領域を確保すること、これが両者の「個人主義」の内実として共通するところであり、それはすなわち Berlin のいう消極的自由、あるいは観念史家の Steven Lukes の整理するところに依拠すれば「私秘性」(privacy) を核とする個人主義だと言ってよいだろう。しかし Wilde の個人主義は、私秘性＝消極的自由をその条件として前提しながらも、それによって尽くされるものでない。というのも、彼はもう一歩先に進んで「自己発展」(self-development) をその個人主義の核を形成する概念として提示しているのであり、私秘性とは自己発展の前提である限りにおいて擁護されるにすぎない⁹。それぞれの個人主義の中心概念としての私秘性と自己発展——ここに両者の第二の差異がある。

「私秘性」としての個人主義から「自己発展」としての個人主義へと目を移すことは、われわれの探求を世紀末の個人主義から逸らせ、倫理的社会主義、あるいはそれと多くを共有するイギリス観念論の政治思想へと向かわせる。Mark Bevir は、19世紀終わりの20年間におけるイギリス社会主義の生成史を描くその著書を三部により構成し、それぞれの主題としてマルクス主義、フェビアン主義、倫理的社会主義を割り当てるが、そこで倫理的社会主義は以下の特徴規定を受けている。

These ethical socialists concentrated more on the moral development of individuals than on economic or social reforms. They believed that socialism was above all else an ethical doctrine about individual fulfillment in and through organic social relations. Community was a necessary setting for individual growth; individuals could realize their potential only through suitable relations to others. (217)

この記述に含まれるポイントを整理すれば、(1) 経済的、社会的改革に増して個人の道徳的発展が重視されること、(2) 当の倫理的自己実現／自己発展は有機的な社会的結合の内部で、共同体における他者との連関を通して達成されること

の二点を挙げることができる。イギリスにおける倫理的社会主義の展開に観念論哲学者である T. H. Green がもたらした貢献を明らかにした Matt Carter の研究を参照しつつ (1) を敷衍すれば次のようになる——それは単に制度変革を志向するのではなく、それ以上に個人の道徳的発展や個人の人格的陶冶に重きを置く社会主義であり、国家ないしその代替としてのアソシエーションはこうした個人の自己実現のための物質的条件を整備する必要があるが、しかし反対の言い方をすれば、どれほど多くの積極的介入がなされようとも、国家ないしアソシエーションは社会改良を通じて個人に道徳的自己実現を強要し達成させることまでは成しえない。個人の潜在的に有する道徳的発展の余地を前提する点で、この見方は人間性の楽観的理解に基礎づけられており、人間性の機械論的解釈を採用する、より経済学的な側面に力点が置かれる唯物論的社会主義とは区別される (Carter 7-8)。倫理的社會主義は社会制度の変革よりも人間の道徳的、倫理的能力の開発を重視した点で、有能な官僚組織による合理的制度設計を志向したフェビアン主義とは対照的であったし、その人間性重視の姿勢は、マルクス主義の要素であるとしばしば同定された唯物論、その歴史における個人の意志、人間のエイジェンシーの軽視に対する反発¹⁰を伴った (Bevir 228; Carter 146-47)。

ここで倫理的社會主義の鍵概念として、自己発展 (self-development) ないし自己実現 (self-realization) と共同善 (common good) の二つを提示することができる。世紀末における「社会主義の復活」の中で、個人の自己発展に重きを置く社会主義の潮流が形成された事実は、同時期のイギリスにおいて自由主義の概念が被った意味の変容とも無関係ではない。Mill の著作にみられる緊張、すなわちそのヘドニズムとエウダイモニズムあるいは卓越主義との間での揺らぎ¹¹、Green のいわゆる積極的自由あるいは高名な「自由の異なる意味について」の議論¹²は、自己発展や自己実現という、個人の人格の陶冶を問題にする視点を導入することにより、19世紀後半のイギリスにおいて自由主義が新しい意味を獲得するのに貢献した。またこれに関連して、自己実現と共同善の不可避的結合、すなわち個人の人格の発現といっても、その前提として共同体の善の構想が存在しているはずだし、自己実現の帰結にしても共同善に影響を与えざるをえないという思考の型は、コミュニタリアンの先駆と目される観念論者に常に付きまとうテーマであった。上記二つの鍵概念を用いて先に整理した倫理的社會主義の特徴を書き換えれば、(1) 自己発展／自己実現の重視、(2) 自己発展／自己実現と共同善の不可避的連関の二つを得ることができる。

そこでわれわれは、Wilde が世紀末の個人主義者たち、すなわち個人の私秘性

を核に据えた消極的自由、共同善や社会的紐帯を度外視した自由の観念に固執した論者たちからは大きく距離を取り、倫理的社会主義の二つの特徴をそのエッセイ *Soul of Man* の柱として定立していることを明らかにしよう¹³。その後、論考の締めくくりとして、個人の能力の発現が共同善に貢献せざるをえないという、一見したところでは道徳的お説教以上のものになりえないように思える発想が、同時代の文化的、神学的潮流を背後に隠し持つものであることを示したい。

まず(1)個人の自己発展の重視についてみていこう。このエッセイにおいて、貧困の状態に置かれている人々の境遇が問題となっていることは疑いないが、ここでは貧困の構造的要因に関する議論、制度変革によるその解決の道筋が提示されるのではない。貧困をもたらすのは私有財産制であり、その廃止が貧困を解消しうることが示唆されているにせよ、そのメカニズムについて論じる意図は Wilde にはさらさらしない。そもそも貧困はいかなる意味で問題とみなされねばならないのか——こう彼は根源的問いを提示する。それが問題であるのは、貧困は貧困の条件下に暮らす人々に内在する個性、潜在的資質の発現を妨げるものであるからだ。“It [private property] has debarred one part of the community from being individual by starving them” (238). ここで“being individual”の二語により意味されているのは、“[to] freely develop what is wonderful, and fascinating, and delightful in him”ということであり、自らの内なる価値あるものを実現した／しつつある状態にあることにほかならない。Wilde は、富者によるチャリティに感謝の意を表明する貧者は、自らの価値ある個性を、その魂を犠牲にしていると言う。反対に、ある貧者が真正の個性を大切に扱うことができるのであれば、彼は施しに感謝をしない。“[A] poor man who is ungrateful, unthrifty, discontented, and rebellious, is probably a real personality, and has much in him” (235). Wilde が社会主義によって意味しているのは、万人による“self-realization” (266) を可能とするために到来すべき社会のヴィジョンなのであり、このエッセイは徹頭徹尾、個性 (personality) の実現 (realization)、完成 (perfection)、発展 (development)、成長 (growth) といった語彙で埋め尽くされている。

その自己発展への執着から予想されるように、Wilde は制度変革を、それが個性の実現に貢献する限りにおいて有意義なものであると考える。以下の Wilde からの引用は、社会改革は個人にその自己発展を強要することまでは成しえず、国家のすべきことの全ては自己発展のための物質的条件、個性の開花のための環境を整備することだけであると考え Green ら観念論者の文章とも見紛うほどである。

[Socialism will] insure the material well-being of each member of the community. It will, in fact, give Life its proper basis and its proper environment. But for the full development of Life to its highest mode of perfection, something more is needed. What is needed is Individualism. (233)

ここでは個性の実現でなく、個性の実現がその背後にある／それを超越した全体的原理である「生 (Life)」の展開、完成として表現されていることに注意しなくてはならないが、その含意については後で論じる。いま注目したいのは、社会主義が成すことは共同体の構成員の物質的生活の向上であり、それは「生」の展開に不可欠な基礎、環境を提供するにすぎない——「生」の全面的開花を実現するためにはより多くのものが必要で、それは「個人主義」、すなわち各個人の潜在的資質の全面的発現である、という Wilde の発想だ。次に引く Green の“*Liberal Legislation and Freedom of Contract*”に関する講演からの一節と、Wilde の先の引用との親近性は明らかであろう——“it is the business of the state, not indeed directly to promote moral goodness, for that, from the very nature of moral goodness, it cannot do, but to maintain the conditions without which a free exercise of the human faculties is impossible . . .” (202).

先にも言及したように、倫理的社会主義とイギリス観念論の社会思想は、その深部において密接な関わり合いを持っている。19世紀終わりの四半世紀に勢力を増したイギリス観念論運動の本格的な出発点といえる Green は、20世紀の福祉国家を思想的に準備する新自由主義 (New Liberalism) を先駆的に唱えた思想家であるとしばしば考えられている¹⁴。しかし、観念論者の Bernard Bosanquet は Green を右側へと引き寄せ、国家干渉を廃したレッセ・フェールを支持、もう一人の観念論者の D. G. Ritchie は、Green を左側へと連れ込み、大幅な国家干渉を要請したとしばしば言われることから分かるように (Brink, *Perfectionism* 109; Nicholson xxiii)¹⁵、新自由主義やフェビアン社会主義に代表されるような、自由放任型経済の限界を指摘し、国家が介入すべき領域の拡大を目指すという発想に関して、観念論者の立場をひとしなみに扱うことができると考えるわけにはいかない。この点は念頭に置いた上で、しかし Carter は、観念論者の間には合意があり、それは “[the] state was important in providing the conditions to enable individuals to make the best of themselves” ということ、かつ “character must be the focus for reform: without it, changes to the social environment would have little impact on the individual” (91) ということであつたと主張する。環境 (environment) と品性 (character) の対

立というヴィクトリア時代的なテーマにおいて¹⁶、観念論者は環境の改変を重要視したけれども、物質的条件の改善それだけでは何にもならず、本来の目的は品性の発展成長の内にあり、それに資する限りにおいて環境の改善に意味があると考えた。こうしてみれば、Wildeの卓越主義的社会主義論が、環境の人為的改良を重視する経験主義の伝統の書き換えを目論んだ個人主義者の品性＝環境論¹⁷とは異なり、個人の自己発展を究極的目的とし、品性の開発を犠牲にすることなく環境の改良の必要性を主張したものであったことが分かる。

次に、(2) 自己発展と共同善の不可分性という論点に移ろう。古典的自由主義の見方においては、個人の自由は他者からの干渉の排除を条件として成るものであり、個人の利益が共同体の他の成員のそれと潜在的に対立し合うゼロ・サムの世界観が基調となっている。しかしGreenの提示する共同善のヴィジョンは、個人の潜在的能力の発現や自己実現を、他者のそれと対立し合うものでなく、共同体の善と両立可能のものであること、あるいはより積極的に、共同体の善に貢献するものであることを主張することで、自由主義の内実を時代の要請に応じ書き換えることを意図したものであった。自由を単に拘束の欠如とみなす消極的自由観は否定され、同時にそれは個人により単独で享受することのできない共同性を有するものであることが主張される¹⁸。

Greenが叙述する自己発展としての自由と共同善の不可分性という原理が、Wildeの*Soul of Man*においても働いていることをみていこう。まず、人間の個性が有機体＝植物に喩えられる次の一節について検討したい。

It will be a marvelous thing—the true personality of man—when we see it. It will grow naturally and simply, flower-like, or as a tree grows. It will not be at discord. . . . It will not be always meddling with others, or asking them to be like itself. It will love them because they will be different. And yet while it will not meddle with others it will help all, as a beautiful thing helps us, by being what it is.” (239-40)

ここで、個性の発現＝自己発展が花や木の成長の比喩で語られていること、植物の個性の発現が自然界の調和を乱すことなく、むしろそれらの多様な個性こそが自然の調和を構成しているのと同様に、人間の個性の発現もまた、社会の有機的調和を導くのに貢献するものと主張されていることに注意しよう。個人を花、国家をその開花の条件を整える義務を負う庭師とする比喩が、観念論者で

ある Bosanquet や Henry Jones、Ritchie によっても用いられたことから推測できるように、個性を植物に喩え、当の有機体の比喩に調和の種子を孕ませると言う Wilde の手法はきわめて観念論的であると言える (Carter 82; Ritchie 60)。

自己発展と共同善の調和が描かれるもう一つの例として、以下の一節においては、個人主義は対立を生み出すどころか、自発的共感をもたらすものであることが主張される。

A red rose is not selfish because it wants to be a red rose. . . . Under Individualism people will be quite natural and absolutely unselfish Nor will men be egotistic as they are now. For the egoist is he who makes claims on others, and the Individualist will not desire to do that. . . . When man has realized Individualism, he will also realize sympathy and exercise it freely and spontaneously. (264)¹⁹

それでは、Green や Wilde において、自己発展と共同善の調和を達成させる原理はいったい何なのか。それをいかなる思想史的潮流、文化的潮流に帰することが可能なのか。ここでわれわれは倫理的社会主義と強く結びついた内在論 (immanentism) へと目を向けなくてはならない。

個人の自己発展が高次の次元における社会的調和に貢献するものとする Green の倫理 = 社会思想は、ヴィクトリア時代に生じたより大きな神学的、文化的潮流の変化を背後に隠しており、その一つの発現形態であると考えられることができる。すなわち「贖罪に重点をおいた 19 世紀前半の厳しい福音主義的神学が、1860 年代頃に、イエス・キリストの受肉 (救済) を強調する楽観的な神学へと変化した」と指摘される事態である (金澤 142)。Burrow はその世紀転換期ヨーロッパ思想史研究において、リベラル・アングリカニズムの記念碑的論集 *Lux Mundi* (1887) を受肉 (Incarnation) の神学、内在論の典型として取り上げ、それを世紀前半の福音主義的志向、超越性に重点が置かれたキリスト教と対比させる形で、この文化的潮流の変遷を整理している。個々の人間はその内にキリストの神性を分有しているとみなす内在論は、人間的生の苦悩に拘泥するかわりにこの地上における生活の改善に向けた社会改革の運動を動機付けた。*Lux Mundi* の編者 Charles Gore が社会主義者であることから推察できるように、受肉のモチーフは社会改良あるいは社会主義の主唱者らを強く印象づける何物かを有していた (Burrow 204; Carter 109-12; Reardon 318-37)。

イギリスにおけるこの超越性から内在性への重点の変化は、一方で進化論を初めとする自然科学上の新知見の確立、他方ではドイツの観念論的形而上学と高等批評の影響の下で生じたものである。地質学的、生物学的知の蓄積により、自然を超越する神／自然の斉一性に奇跡的に介入する神という観念が維持しがたくなり、時代的、地域的に特殊の一宗教としてのキリスト教を世界精神顕現の一段階とみなすヘーゲルの宗教観、史的テキストとして聖書を研究する高等批評が力を持った。そこで神性は人間的生を超越するものとしてより、地上的個物に内在するもの／地上的個物を通し自らを表現するものとして想定されることが都合の良いように思われた (Bevir 221-23; Burrow 197-200)。

イギリス観念論者たちもまたこの潮流の上に位置づけられることを確認しよう。Sweetは、観念論者の倫理学、とりわけその自己実現の理論の背後に宗教思想が据えられていることを示し、Greenの倫理学において、そのイエス理解、すなわち受肉論の持つ重要性を論じている。すなわちGreenにとってキリストは「理想の人間」であり、受肉はわれわれの精神がキリストのそれと化す出来事である。キリストの死と復活は、肉体的＝経験的自己の屈服と道徳的新生として理解されなくてはならない (Sweet 571)。言い換えればキリストは自己実現の象徴的人物であり、そしてこの資質がわれわれ個々人にも宿っていることを示唆するのが受肉の契機なのだ。この内在論的ヴィジョンゆえに、Greenの社会思想においては自己実現と共同善の調和が保証される (Vincent and Plant 9-14)。

Wildeにとっても、イエスとは彼自身の生きた時代において最高の形態の自己実現を達成した理想的人間であった。キリストの功績は、何にも増して個性の発現に執着したことにある。そして彼が富や貧困について語ったのは、それが個性の実現に関係する限りにおいてであった、というのがWildeの見解だ。彼の思案において、イエスのメッセージはこうであったはずだ——“You have a wonderful personality. Develop it. Be yourself. Don't imagine that your perfection lies in accumulating or possessing external things. . . . And so, try to so shape your life that external things will not harm you. And try also to get rid of personal property. . .” (241)。

ここで、Wildeは私有財産制の廃止という社会主義の目標を、イエスの教えと結び付けるが、それは世紀転換期のイギリスにおいてきわめて特異な発想であったと考えることはできない。Bevirは自身が「倫理的アナキズム」²⁰と呼ぶものを倫理的社会主義の一形態として扱うが、Peter KropotkinやLeo Tolstoyに影響を受けた「新しいアナキスト」たちは、イエスの生涯、その教えを私有財産の否定、そして私有財産が不可避免的に要請する権威を拒絶することと関連づけたし、労働

教会(その設立においても内在論的、倫理的社会主義が重要な役割を果たした)のメンバーにも両者の連関を主張する者がいた²¹。

しかしWildeにおいては、キリスト教が自己発展と共同善の調和を達成する最高の形態とみなされているわけではないことに注意しなくてはならない。彼によれば、個性はその展開においてキリスト教の助けを借りることがありうるが、しかしそんなことをしなくても個性は確実に展開する。個性は自らの法則、自らの権威にのみ付き従うけれども、自ら [= 個性] を強化してくれる者、自らについて頻繁に問題にしてくれる者を愛する。そして個性が愛した者の一人がキリストだった(240)。

ここではキリスト教が、擬人化(personify)された「個性」の史的展開におけるただかその一顕現形態であるときとみなされており、Wildeはキリストが苦悩を通して実現した個人主義は、来るべき「新しいヘレニズム」の時代においては欣喜を通し表現されると考えている(267-68)。すなわち、歴史を貫徹する原理は個性(personality)、人間性(Humanity)、個人主義(Individualism)の自己表現なのであり、時代的、地域的に特殊の歴史的舞台において生活を営む個人は、それらの原理がそこに自己を顕現する場を見出す器のごときものである²²。自己発展と共同善の調和はそうした機構により保証されるのであり、先にWildeが個性の実現を議論するのに、全体的な「生」の原理を持ち出していたことも、この文脈において理解することができる。

Burrowの描く思想史の構図に則れば、ドイツ観念論と高等批評がキリスト教を歴史的、地域的に限定された特殊的一宗教として理解する道筋を用意したことで、来るべき救済、あるいは神的なものの顕現について思索する文化的潮流が生まれた。それはキリスト教の枠組みを超え出るもので、Wagnerはドイツ民族の神話、W. B. Yeatsはケルトの民間伝承あるいはのちに*A Vision*において展開されることになる神秘主義の体系の内に、フランス詩人たちは「象徴」の内に、神的顕現を予期した²³。Wildeにとってこれらの代替となるものは「個人主義」の原理の自己顕現だったのであり、このヴィジョンにより彼は、私密的自由を核とする原子論的個人主義を超克し、観念論の土壌より養分を得ながら、自己発展と共同善の内在論的調和を信頼することができた。そしてこのことは、*The Picture of Dorian Gray*や“The Portrait of Mr. W. H.”において物語の形態によって描かれる人格の侵襲的交流——Harold Bloomによって「影響」と名指されることになる、自己の外殻の溶解——へのWildeのオブセッションとの関連性を想起させずにはおかない。ここにいたって、しばしばWildeによって提示される中心性、安定性を

欠いた「自己」概念の孕む観念論的契機を探求する必要性が理解されるはずである。

*本研究は、JSPS特別研究員奨励費26・7269の助成を受けたものである。

註

- 1 Wildeの社会主義を理解する困難について、Thomas 83; Guy, “Wilde” 243参照。
- 2 ヴィクトリア時代の後期においては、前期に支配的であった貧困観念、すなわち“pauperism”の存在を個人の意志的「選択」に帰する発想に代えて、周期的な景気変動＝自然法則の産物としての構造的貧困という概念がしだいに受け入れられるようになった。Harris 237-41参照。
- 3 ただし、Thomasとそれを受けたDansonが引いているように、*Fabian Essays* (1889)の内のSydney Olivierの寄稿文には次の一文を見出すことができる——“Socialism is merely Individualism rationalised, organised, clothed, and in its right mind” (qtd. in Thomas 90; Danson 162). またBeatrice Potter (のちのBeatrice Webb)は1890年2月15日の日記に以下のように書き記していた——“I have become a socialist . . . because I believe that only under communal ownership of the means of production can you arrive at the most perfect form of individual development, at the greatest stimulus to individual effort; in other words complete [sic] socialism is only consistent with absolute individualism” (Webb 326). こうした例はあるものの、基調として*Fabian Essays*において「個人主義」の語は自由放任資本主義の言い換えに用いられており、それは社会主義と敵対的なものと措定されるのが通例であった (Danson 162)。なおPotterの日記からの引用は、近藤和彦のイギリス小史より示唆を得たものである (241)。
- 4 本論では“British Idealism”の訳語として「イギリス観念論」を使用する。日本においてはとりわけ河合栄治郎による本格的なT. H. Green受容以来、この語に「イギリス理想主義」の訳語をあてがうのが通例であり、著者もまたその使用に強く異を唱えるものではない。しかし19世紀終わりの四半世紀にイギリスにおいて力をもった哲学的「アイディアリズム」が、自国の「経験論」との対決を意識した思潮であったこと、同時にイギリス経験論と対照されるドイツの「イデアリスムス」には「観念論」の訳語が定着していることを考慮に入れて、イギリス＝経験論・対・ドイツ＝観念論という広く流布する二項対立を前提としながらも、この対比構造における「余剰」としてのブリティッシュ・アイディアリズムを問題にしているという事実を明瞭にするために、あえて「イギリス観念論」の訳語を使用した。 (じっさい、経済的、軍事的競争の下で反ドイツ感情の高まった世紀転換期のイギリスにおいて、「アイディアリズム」は「ドイツ的」哲学として批判の目を向けられた。『ヴィクトリア朝文化研究』第13号 (2015年) に掲載の拙稿「D・G・リッチーとオスカー・ワイルド——世紀末のイギリスにおける「設計への意志」」において、簡単にこの

- 問題に触れている。)小田川もまた『イギリス理想主義の展開と河合栄治郎』(行安茂編)の書評において、「イギリス観念論」という訳語の使用を提唱している。
- 5 政治運動としての「個人主義」に関する以下の叙述はTaylor, *Men* に依拠している。
 - 6 選挙法改正により有権者の過半を占めることになった労働者階級が、大方の予想に反し保守党の重要な支持基盤を形成し「保守党支配の時代」の実現に貢献したことに関して、政治団体プリムローズ・リーグによる労働者階級の動員に注目した研究として小関参照。
 - 7 社会主義を退歩とみなす個人主義者の歴史観について、Taylor, *Men* chap. 5 参照。
 - 8 同連盟について、Bristow; Taylor, *Men* Introduction 参照。
 - 9 「私秘性」としての個人主義についてはLukes, *Individualism* chap. 9 を、「自己発展」としての個人主義については同書 chap. 10 を参照。
 - 10 倫理的社会主義者の全てが観念論者ではないのはもちろんのこと、観念論者をのきなみ倫理的社会主義者とみなすことができるのでもない。しかし、自己実現の倫理、共同善の社会思想という二つの柱を中心として、両者の知的運動は多くの重なり合う領域を有していたのであり、とりわけGreenが同時代の倫理的社会主義者に靈感を与えた存在であったこと、そしてGreen自身をもその一員と数えることは、Bevir とCarterの研究から明らかである。そのうえで、観念論者が歴史における人間主体のエイジェンシーや自己意識的な制度設計能力を強調したことと、倫理的社会主義者がマルクス主義的唯物史観に反発したことの間には必然的連関があると言わねばならない。これら観念論者の議論について、Den Otter chap. 3; Freeden chap. 3; Boucher; Taylor, *Men* chap. 4 参照。
 - 11 Millの卓越主義、エウダイモニズムに関し、Brink, *Mill's* chap. 3; Nussbaum; 小田川「ミル」参照。
 - 12 “On the Different Senses of ‘Freedom’” (Green 228-49).
 - 13 *The Soul of Man* をGreenの倫理学との関連において論じる視点を提示する例外的研究としてRoss 154-61 参照。ただしRossは世紀末における「古代ギリシア」観に関係する限りにおいてGreenの思想をWilde解釈に導入しているのも、イギリス観念論や倫理的社会主義の思潮全般を*Soul of Man*の背景として描出しているのではない。
 - 14 Greenを新自由主義(New Liberalism)の先駆とみなす解釈の妥当性に関しさまざまな議論がある。左は新自由主義の祖とみる解釈、右は彼をCobdenやBrightらのマンチェスター学派、その自由放任型経済支持の立場からほとんど距離のない思想家とする解釈まで、幅の広い立場が存在する。これら研究史を短くまとめたものとしてCarter 44-51; 若松31-45 参照。
 - 15 新自由主義研究の最重要文献であるFreeden, *The New Liberalism* は、イギリス観念論の哲学者、とりわけGreenが自由主義の意味の転換に寄与した貢献に関して否定的な立場を取っているが(16-18)、Ritchieは疑いなく新自由主義の思想家であるとみなされ大きな扱いを受けている。
 - 16 ヴィクトリア時代の政治思想における「品性」概念の中心性について、Collini 参照。

- 17 精神をタブラ・ラサとみる経験論、連合心理学の伝統は、外的環境の改善に積極的な急進的社會改良の哲学を生み出してきた。しかし「個人主義者」に思想的骨格を提供した Spencer は、連合主義の系譜の上に立ちつつもそこに進化のファクターを導入し、ある人種の現在の姿は、先行する各世代がその環境との相互関係の中で獲得した性質が遺伝により蓄積され受け継がれたものなのだから (Spencer は Lamarckism を採用する)、現在の世代にはある生得的所与が存在していると考えた。それゆえ現在の世代は環境の人為的改変によりごく短期間のうちに自らの性質を改変することはできないし、環境への設計主義的介入によって、これまで続いてきた自然な環境との接触のプロセス＝進化のコースに断絶をもたらすのは有害なことであるとみなされる。これにより、Spencer とその後継者たる個人主義者は、経験主義的伝統を受け継ぎながら、その急進主義的社會思想を保守主義的信条へと転換することに成功した。以上について、Taylor, *Men* chap. 3; id., *Philosophy* chap. 5 参照。
- 18 “When we speak of freedom as something to be so highly prized, we mean a positive power or capacity of doing or enjoying something worth doing or enjoying, and that, too, something that we do or enjoy in common with others. We mean by it a power which each man exercises through the help or security given him by his fellow-men” (Green 199)
- 19 自己への固執が利己心の消滅をもたらすという思索は、“Self-Reliance” と同時に “all mean egotism vanishes” と主張する Emerson の思想と同型であり (20)、Murray はこの引用箇所のほかにも、Wilde が Emerson から被ったと想定される影響を詳細に跡付けている。そしてわれわれの文脈においてさらに重要なことに、Emerson や Thoreau らアメリカ・ロマン派の思想家たちは、Thomas Davidson、Edward Carpenter といった人物を通してイギリスの倫理的社會主義の生成に一定の寄与をした。この点について、Bevir chap. 12 参照。
- 20 Bevir は同時代の性の解放運動が倫理的アナキズムに接近したこと、同時に後者が性改革の関心を有していたことを指摘するが (269-73)、Wilde をこの文脈において論じることが的外れでないことは明らかであるように思われる。
- 21 「倫理的アナキズム」と「労働教会運動」については、それぞれ Bevir chap. 13-14 参照。
- 22 Wilde が自己実現の理想的形態を体現する人々について論じる際、“These are the poets, the philosophers, the men of science, the men of culture—in a word, the real men, the men who have realized themselves, and in whom all Humanity gains a partial realization” (233) として、人間性 (Humanity) が卓越的个人において部分的実現を得ることが示されている。あるいは “the great actual Individualism latent and potential in mankind generally” (237) とか、“Individualism expressing itself through joy” (267) といった表現によって、われわれ個々の人間が個人主義の原理を確立していくというより、個人主義の原理こそが歴史的舞台を通じ自己を実現していくという描き方がなされている。
- 23 Burrow chap. 6 参照。

Works Cited

- Berlin, Isaiah. "Two Concepts of Liberty." *Liberty*. Ed. Henry Hardy. Oxford: Oxford UP, 2002. 166-217. Print.
- Bevir, Mark. *The Making of British Socialism*. Princeton: Princeton UP, 2011. Print.
- Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence: A Theory of Poetry*. New York: Oxford UP, 1973. Print.
- Boucher, David. "British Idealism and Evolution." *The Oxford Handbook of British Philosophy in the Nineteenth Century*. Ed. W. J. Mander. Oxford: Oxford UP, 2014. 306-23. Print.
- Brink, David O. *Mill's Progressive Principles*. Oxford: Oxford UP, 2013. Print.
- . *Perfectionism and the Common Good: Themes in the Philosophy of T. H. Green*. Oxford: Clarendon, 2003. Print.
- Bristow, Edward. "The Liberty and Property Defence League and Individualism." *Historical Journal* 18 (1975): 761-89. Print.
- Burrow, J. W. *The Crisis of Reason: European Thought, 1848-1914*. New Haven: Yale UP, 2000. Print.
- Carter, Matt. *T. H. Green and the Development of Ethical Socialism*. Exeter: Imprint Academic, 2003. Print.
- Collini, Stefan. "The Idea of 'Character' in Victorian Political Thought." *Transactions of the Royal Historical Society* 35 (1985): 29-50. Print.
- Danson, Lawrence. *Wilde's Intentions: The Artist in His Criticism*. Oxford: Clarendon, 1997. Print.
- Den Otter, Sandra M. *British Idealism and Social Explanation: A Study in Late Victorian Thought*. Oxford: Clarendon, 1996. Print.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Portable Emerson*. Ed. Jeffrey S. Cramer. New York: Penguin, 2014. Print.
- Freeden, Michael. *The New Liberalism: An Ideology of Social Reform*. Oxford: Clarendon, 1978. Print.
- Green, T. H. *Lectures on the Principles of Political Obligation and Other Writings*. Ed. Paul Harris and John Morrow. Cambridge: Cambridge UP, 1986. Print.
- Guy, Josephine M. "Oscar Wilde and Socialism." *Oscar Wilde in Context*. Ed. Kerry Powell and Peter Raby. New York: Cambridge UP, 2013. 242-52. Print.
- . "'The Soul of Man under Socialism': A (Con)Textual History." *Wilde Writings: Contextual Conditions*. Ed. Joseph Bristow. Toronto: U of Toronto P, 2003. 59-85. Print.
- Harris, José. *Private Lives, Public Spirit: A Social History of Britain, 1870-1914*. Oxford: Oxford UP, 1993. Print.
- Lukes, Steven. *Individualism*. Colchester: ECPR, 2006. Print.
- Mill, John Stuart. *On Liberty and Other Writings*. Ed. Stefan Collini. Cambridge: Cambridge UP, 1989. Print.
- Murray, Isobel. "Oscar Wilde and Individualism: Contexts for 'The Soul of Man.'" *Durham*

- University Journal* 52 (1991): 195-207. Print.
- Nicholson, Peter P. Introduction. *Darwinism and Politics; Principles of State Interference*. By D. G. Ritchie. Ed. Nicholson. Bristol: Thoemmes, 1998. vii-xxviii. Print.
- Nussbaum, Martha C. "Mill between Aristotle and Bentham," *Daedalus* 133.2 (2004): 60-68. Print.
- Reardon, Bernard M. G. *Religious Thought in the Victorian Age: A Survey from Coleridge to Gore*. 2nd. ed. London: Longman, 1995. Print.
- Ritchie, D. G. *Darwinism and Politics; Principles of State Interference*. Ed. Peter P. Nicholson. Bristol: Thoemmes, 1998. Print.
- Ross, Iain. *Oscar Wilde and Ancient Greece*. Cambridge: Cambridge UP, 2013. Print.
- Shaw, George Bernard, ed. *Fabian Essays*. London: Pickering and Chatto, 1996. Print.
- Smith, Philip E, and Michael S. Helfand, ed. *Oscar Wilde's Oxford Notebooks: A Portrait of Mind in the Making*. New York: Oxford UP, 1989. Print.
- Spencer, Herbert. *Social Statics*. London: Routledge, 1996. Print.
- Sweet, William. "British Idealist Philosophy of Religion." *The Oxford Handbook of British Philosophy in the Nineteenth Century*. Ed. W. J. Mander. Oxford: Oxford UP, 2014. 560-84. Print.
- Taylor, M[ichael] W. *Men versus the State: Herbert Spencer and the Late Victorian Individualism*. Oxford: Clarendon, 1992. Print.
- . *The Philosophy of Herbert Spencer*. London: Continuum, 2007. Print.
- Thomas, J. D. "'The Soul of Man under Socialism': An Essay in Context." *Rice University Studies* 51 (1965): 83-95. Print.
- Vincent, Andrew, and Raymond Plant. *Philosophy, Politics, and Citizenship: The Life and Thought of the British Idealists*. Oxford: B. Blackwell, 1984. Print.
- Webb, Beatrice Potter. "Glitter around and Darkness within," 1873-1892. Vol. 1 of *The Diary of Beatrice Webb*. Ed. Norman and Jeanne MacKenzie. Cambridge: Belknap P of Harvard UP, 1982. Print.
- Wilde, Oscar. *Criticism: Historical Criticism, Intentions, The Soul of Man*. Ed. Josephine M. Guy. Oxford: Oxford UP, 2007. Print.
- 小田川大典「書評『イギリス理想主義の展開と河合栄治郎——日本イギリス理想主義学会設立10周年記念論集』行安茂編」『イギリス哲学研究』第38号(2015年)、73-74頁。
- 「ジョン・スチュアート・ミル——功利主義と代議制」『近代の変容』宇野重規編、岩波書店、2014年、25-47頁。
- 金澤周作「19世紀」『イギリス史研究入門』近藤和彦編、山川出版社、2010年、128-53頁。
- 小関隆『プリムローズ・リーグの時代——世紀転換期イギリスの保守主義』岩波書店、2006年。
- 近藤和彦『イギリス史10講』岩波書店、2013年。
- 若松繁信『イギリス自由主義史研究——T・H・グリーンと知識人政治の季節』ミネルヴァ書房、1991年。